

# 鼠 いる か 事

建治三年 五六歳

已前の御文御返事申し候ひしか。

鷺目<sup>ひとゆ</sup>一結び、三年の古酒一筒給び了んぬ。

御文に云はく、安房国にねずみいるかとかや申し候大魚<sup>或は十七・八尋  
或は二十尋云云</sup>、乃至彼の大魚を鎌倉に、乃至家々にあぶらにしぼり候香たえ候べきやう候はず、くさく等云云。

扶桑記<sup>ふそうき</sup>に云く「出羽国に四月八日河水泥水にして死魚<sup>ようそく</sup>浮かび、山擁塞して流れず。両の大蛇有り長さ各十丈<sup>ばか</sup>許り、相連なり流出して海江に入る。小蛇の随ふは其の数を知らず。河に依って苗稼<sup>みょうけ</sup>流れ損ずるもの多し。或は濁水に没し、草木死朽<sup>しきゅう</sup>して而も生せず○但弘仁年中○乃至兵役<sup>これ</sup>之<sup>や</sup>を火く。又塚墓骸骨其の山水を汚す」等云云。此の外内典に伝ふるに臭氣に依って悪鬼国<sup>あつ</sup>に入って聚まる。